

シバ犬

近くに、犬をつれて泊れる小さなホテルがある。数年前に「犬といっしょに泊れる」ホテルになってから急に客がふえた。五月の休みや夏休みは連日満パイの様子。バス停がそばなので、いやでもその前を通るが、家族連れはともかく、若いカップルが多いのに驚く。以前はヒトが遊んでいたテニス・コートが犬の遊び場となり、子供用だったと思われるプールで犬たちが遊んでおり、いずれも、そのまわりで犬の飼い主たちが声をあげて犬の名を呼び応援(?)している。

わたし自身は、十七年間いたシバ犬が死んでからは、犬を飼っていない。犬がいなくなってもう十年余り過ぎた。いなくなっただけは犬が欲しくてつい分迷ったが、結局アキラメた。それでも未練がましく、「お金持は羨ましくない、犬持が羨ましい」などと冗談をいっていた。今でも、いいシバ犬をつれて散歩しているひとを見かけると、指をくわえて見つめながら、思わずそばに近寄っていくので、注意が必要——。シバ犬ストーカーで訴えられては、いくらシバ至上主義であっても恥かしい。

それほどまでの思いがあるなら飼えばいいのではないかといわれそうだが、アキラメた理由はいろいろあった。まず、犬が十五年以上生きるとなれば、こちらの体力がその時には相当に落ちているから、老老介護となり、それはおたがいにきつい。ヒトの方の年齢があがるにつれて、犬

への精神的依存度が高まるのが予想される。つまり、犬にかまけすぎて、ナンニモできなくなるかもしれない。

さらに、犬のいる間、旅行の時には家族のだれかが家に残らねばならなかった。ヒトの寿命、犬の寿命、自分の体力、残り時間の使い方等々を考えると、シバ恋は断念。自分も相手も生き物だから感傷的にことを運ぶのがいっばんよくないと思ったのである。

もちろん犬のいた十七年間には、犬との思い出はいろいろある。自分の無智のせいで犬を苦しめたことがあったとの後悔、家出した(?)犬を遠くまでさがしにいった時の不安、楽しかったいくつもの場面、犬特有の行動がとれなくなった老齢の姿。しかし、それらのいちいちを他人にはいうまいと思ってきた。病氣自慢と同じくらい、犬猫自慢のハナシを聞かされたり読まされたりするのが苦手なので。

ところで、夕方の散歩時に出会う犬や、犬をつれて泊れるホテルにくる犬を遠目から見ている気づくのは、二十年前より「服を着ている犬」と「ふとっている犬」が多くなったことである。犬は毛を着ている文字通りケモノなので、毛皮の上に、さらに服を着ると冬でも暑いのではないかと、他人事ながらいつも気にかかる。犬が「洋服」をねだったとも思えないのだが。

「ふとっている犬」がふえたのも、ヒトと同じような理由なのではないかと思われる。食べすぎと、運動不足。昔のひとは、残りの冷やごはんに残った味噌汁をぶっかけてやっていた、なんていおうものなら、動物虐待といわれかねないご時世だから、うっかり昔語りはできないが、ドッ

グ・フードが出現したのはいつごろのことだったか。今は、犬のおやつづくり方レシピまで雑誌に出ている。犬は思っているだろうか——喜んでいいのか、悲しんでいるのかと。それとも、やはり手づくりのものはおいしいなど。

スイミング

子供のころ、といっても小学校の四、五年のころだが、夏休みというときセミとりしていたのを思い出す。戦争のせいで大阪市内から北摂に移住し、コンクリートの道路にローセキで絵を描いて遊んでいた子供が、はじめて自然に対面した。

家にも大きな桜の木があったが、前の通りが桜並木なので、近所の子供らがセミをとるのに布の袋をつけた長い竹竿をもってうろついているのである。桜の木の幹にはセミがたくさんとまっています、うるさいくらいに鳴いている。

近所の子供らの真似をして、竹竿に布の袋をくつつけてもらい、かれらについて歩く。はじめは、桜の木の幹の色とセミの見分けがつきにくいですが、だんだんセミとりのコツを覚えていく。近所の子が、これがアブラ（油蟬）、これがニイニイと教えてくれる。まだ羽化する前のセミの子（？）を、たしかウンゴロと教えられた記憶がある。クマ蟬がとれた時はみんな自慢するのだったが、翅の透きとおった大きなそのセミは樹の高いところについて、とるのがむづかかった。そ

のセミを、かれらはクマ蟬といわず、別の呼び方をしていたが、今はそれを思い出そうとしても思い出せない。とにかく一日は長かった。

近くに川があつたが、だれも川へは行かない。泳げるほどの深さのない川だったからかもしれない。

それにしても、と思うのは、時代環境の「時差」で、父親は子供のころ淀川で泳いだといつたが、それは明治の終りか大正のはじめだと思われる。わたしは四十代なかばまで泳げなかつた。あるキツカケで四十六歳の時に近くのスイミング・スクールに通つた。普通のひとの二倍くらいかかつて、やっとクロールで二十五メートル泳げるようになった時はうれしかった。

この時のことを水泳が話題になって若いひとたちに喋しゃべつたことがあつた。すると「どうして小学校の時プールで練習しなかつたのか」とかれらは問うてきた。「小学校の時プールはなかつた」といつても、その意味は通じない。

学校にも町内にもプールはなかつたし、「学童疎開」で強制的につれていかれたイナカの村にもプールなんてない。つまり、敵機から身を守るべく「防空壕」に逃げるような日常になつてくると、子供を水で遊ばせたり、泳ぎを教えたりする余裕が世間にはなくなつてくる。ところが、こういうことを説明してもかれらはよくわからないようなので、結局その年齢になるまで泳げなかつたのは、ドンクサイわたしの個人的な非力のせいであつたことにして、かれらに笑つてもらうしかないのである。

スイミング・スクール流の泳ぎを覚えたおかげで、自分でも笑ってしまうことがたびたびあった。スクール卒業後（？）、友人と外国のリゾート地に行った時、以前のようにホテルのプールを指くわえて見ているだけでなく、水のなかへ入っていきけるのがうれしかった。ただ、スクールでいわれた通りにキャップをかぶるのはいいとして、必ずゴーグルをつけないと水に入れないのだ。その上、水に入る前に準備体操をしつかりやる癖がついている。悠々とプールサイドの椅子に寝そべっている外国人観光たちの前では異様な姿であり、異様な行動であったはずである。

女殺油地獄

元禄時代から五軒の櫓（五座）の並んでいた大阪道頓堀も、今では芝居カブキのかかるのは松竹座だけになってしまった。その松竹座、一階のロビーから、二人は並べない狭いエスカレーターに乗り三階までいってやっと客席となる。観にゆくたびに、もし地震か火事でもあつたらどうするだろうと不安になるのは、心配性のせいなのだろうか。

いつも小屋の文句をいいながら、それでも芝居がかかると伊豆のイナカから道頓堀まで出ていく。ご苦労さんなことはあるが、ヨーロッパまでオペラを観にゆくひとだつてあるのだから、それよりは近い。東京の歌舞伎座では毎月カブキ公演がある。大阪よりは近いからそこへも気に入った出しもの時はゆくが、大阪でのカブキ公演は年に二度くらいなので、はずさずに出かけ

るのである。

七月には『女殺油地獄』おんなころしあぶらのじじくが出ていた。昔の夏芝居といえば、視覚的に涼しいもの（本水を使うなど）、季節が夏のもの、ゾーとさせて涼しくするもの（幽霊が出るとか）などと相場がきまっていたのであったが、それはおそらく小屋に冷房がなかったことにも原因があるのだろう。当節は冷房がきいているから、油まみれで、ぬるぬる滑りながらの人殺し劇もとくに暑苦しくならない。

『女殺油地獄』は、もとは人形のために書かれたものだから、油で滑るところなど人形にしかできぬ動き特有のおもしろさがある。ところがそれがカブキ劇となり、人間がすると人形よりリアリズムにならざるをえない。

ところでこの芝居は大坂が舞台であるから、大坂が大阪になっても、虚実の混乱をふいに感じさせられることがある。油屋の女房が今亭主は天満の池田町まで集金にいつて留守だという。その女房を殺すことになってしまふ、向いのドラ息子与兵衛は新町の女となじんでいる。ドラ息子と兄がともに幼い時に父親が死に、そのままでは店がつぶれるというので、親戚が店の番頭を彼らの母の夫にした。息子らにとつて、義父は元使用人。兄息子は独立して順慶町に住んでいる。天満といい、順慶町といい、ドラ息子が油屋女房と出会う野崎といい、大坂の町人、いや現代大阪の観客にとつても聞き慣れた、よく知る町の名前。なにかホントに、芝居小屋の近所に与兵衛がうろついていそうな気にもなる——。よその土地でなら、それらの地名はあくまでシバイのな